大分市 総括会議 ハピカム

ミライデザイン会議

大分合同新聞社が次代を担う若手リーダーと一緒に地域の未来を考えようと、全市町村で巡回開催してきたミライデザイン会議「ハピカム」。その18弾目大分市編が1月31日、同市の大分銀行宗麟館などで行われた。「商業」「観光」「交流」の3分科会での話し合いを経て開かれた総括会議では、分科会の議論で浮かび上がった市の課題をどう解決するかについて話し合った。同市以外の県内市町村の全てで人口が減る中、“一人勝ち”状態にあり、駅ビルや県立美術館などハード整備も集中している大分市。総合アドバイザーの小野正嗣さんは、分科会では危機意識を感じられなかったと指摘。それを受け、大分県の中心として、他の市町村から集中している資源をいかに循環させて大分をけん引していくか、個性の見えにくい市を売り出していくために若手リーダーが取り組んでいくべきことなどを中心に議論した。参加者は、暮心地がよく暮らしやすい現在の環境に安住することなく、新しい魅力にあふれた市を創造していくため、この日の出会いを生かしたさらなる活動に結びつけることを誓い合った。

■ウェブ　http://www.oita-press.co.jp
■スマートフォン　http://www.oita-press.co.jp/h-come/

主催／大分合同新聞社　共催／大分市　大分商工会議所　野津原町商工会

一人勝ちの“果実”全県に分配

優しい人が集まる街に

佐々木　県庁所在地の大分市がどういう方向を向いて、どうなっていくのか大分県の印象を決める大きな要素になります。分科会では大分らしさの定義付けで熱ミさがあったのではと思います。まず初めに大分をどんな街にしたいかを話してください。

高山　中小企業として大分市内で仕事をさせていただいているので、活力ある元気のいい大分という理想のイメージを持っています。自分自身と会社が、大分の活力づくりの力になれるような存在を目指して仕事をしています。

神田　大分県、大分市により多くの人が来てもらい、また住んでいる人も楽しむために優しい街、優しい人たちが集まる街を目指していきたいと思っています。大分市は50万人弱の住民ですが、「○○さんと○○さんは実はお友達」「□□さんの息子は□□さん」とかいろい意味で狭い、だからこそつながりが見える。「協創力」=共に創る力という分科会のキーワードを優しさで満たすと、より強い力になるんじゃないかなと思いました。

八坂　それぞれ皆さんが中心ことに対して、愛をもって取り組む、その中りたい人がチャレンジできる街であって、それを助けるおせっかいな人が増える、そんな街になるといいなと思います。

犠牲の上に豊かさ享受

佐々木　小野さん、分科会の感想も含めていかがですか。

小野　分科会を聞いて危惧したことを申し上げたいと思います。東京のハピカムでは各分科会の議論が白熱して抑えきれないほどの意見が出て、大分に対する強い危機意識が感じられました。きょうの分科会ではあまり危機意識は感じられなかったですね。18市町村中（人口増減で）一つだけ勝っている所ですから。他の市町村のハピカム紙面を見ると危機意識が可視化されていたが、大分市は問題が見えていないんですよ。東京のハピカムでは「大分はいいところまでいっているけど、惜しい、でも惜しいところが仰ぎ代として残されている」ということをみんな言っていて、分科会で誰かが言っていましたが、大分市は突出しているものがない、だから居心地がいい、まったり、ゆったりしている感じだと。突出しているものがないという観点は大切なんだけど、それを大分市の人が言うと他の17市町村の人は納得しない。大分市にだけ県立美術館もでき、駅ビルもでき、発展している。JR九州ホテルプラッサム大分にも他の市町村からたくさん来ているそうですが、その人たちがお金を落として大分市が潤っている。大分市民はある意味、他市町村の犠牲の上に豊かさを享受している責任があると思うんです。「ハブ」という意見がありましたが、人・物・金が還流しないとハブといえない。自分たちだけ集まって、他の所はどんどん吸い収られていくのはとても危機的な状況なので。話を聞いていて大分市の顔が全く見えてこないんですよ。日本の中で大分県はマイナー県じゃないですか。大分という別府、湯布院の名前が出るんです。マイナーな県の中でも個性がある所を抜き取った味気ない顔としてしか大分市が立ちと上がってこないと感じて、観光分科会で大分県にくる人の6割ぐらいは九州の人という話がありましたが、近くの他県の人が大分をどう見ているか、視点を借りることで自分たちを発見し直すことが必要なんじゃないかなと思いました。分科会では大友宗麟のことが出てきたのに話が全然盛り上がらなかった。大分合同新聞が連載小説でやるんですよ、それを絡ってイベントなんかはんぱってできるんだから。せっかくのいい機会を生かして、自分たちの住んでいる街の歴史を再発見することもできるし、大分県全体の歴史を捉えなおすとか、いろんな広がりを持ち得ると思うんです。何年か先まで予定が埋まっている安部龍太郎さんという作家が書き下ろすんですよ。大分県の中で一番大友宗麟に関係がある大分市で、こういう機会を捉えて盛り上がるという熱量が感じられなかったのに驚きました。ラグビーワールドカップやオリンピックなど外から人がたくさん来る時に、一つ物語をつくって全体として盛り上げていくことも重要じゃないかと。居心地や住み心地の良さを外の人にどう伝えるかも重要だと思います。行政が民間を支え、協力してやることで外から人をより入りやすくする、大分の扉を開いてやるというか、せっかくこれだけホスピタリティーにあふれた街ですから。交流の場をつくる努力が行政に足りないのではないか。責任は民間が取ってくれるという思い込みの社会形成体質が大分市と大分県にあると思うんですね。よそから来て一方的に文句を言って申し訳ないですけど、いい立場にいる人はそれを受け入れないといけないと思うんですね。

地域の施設を守りたい

佐々木　蒲江と東京の視点から温かい言葉と受け止めます。やっぱり外からの視点は大切で、例えば八坂さんは「ぶんご・ふない座」をやっていますが、府内町がすごく難しくなっていた時に八坂さんというよそ者がやって来て一気に走り出す、公演を続けている。杵築出身の八坂さんから見て大分の舞台が魅力的に見えるのか、またまとめる秘訣（ひけつ）があるんでしょうか。

八坂　大分市内は本当に劇場に恵まれているんです。コンパルホール、ホルトホール、いわゆる総合文化センターがあって、美術館も市美術館と県立美術館があって。他の市町村にはないし、あったとしても成人式とかんとか大会しますという箱だけ。その中で、ホルトホールがコンパルホールの機能を全部持っていくとなって、府内町にあるコンパルホールがそのまま寂れていくのを何とかしたかった。私は外の人間なので一回限りくらいしかできないんですが、それを継続的にするには地域の人がやって、地域による施設を守ってほしいというのがあって、行き着いた先が演劇だった。紆余（うよ）曲折あったんですが、劇場を街が守るという核が自分の中であったのでできたのかなと思います。街おこしをしようとは全然思ってなくて、後からそれがついてきました。劇場を風化させないようにとやってきたのが大きかったのかなと思います。

物語の語り部になる

佐々木　みんな嫌だ嫌だと言いながらやって、拒手を出ばたらない気持ちになって「まちがろうか」と、あれで街の一体感が出たと思います。せっかくやればできると思えたんだからお薬もしっかりやることになるんでしょう。先ほどの小野さんの提言は思いことばかりでした。大分市に観光地がないと言われる中で、うみたまさは全国屈指の施設です。神田さんは観光に対してどんな思いを持っていますか。

観光／若手リーダー
Hiroaki Kanda
神田大朋 さん
大分市在住、37歳。水族館「うみたまこがイド」主任。2002年にマリーンパレス入社。新たなプランディングを模索しています。

神田　大分の皆さんによくいらっしゃいお客さんが来て、もうかっているね」と言われるんですが、私たちはそう受け止めていないんです。日本に100近くの水族館があり、年間約3500万人が行くとされています。その中でわれわれの水族館は約80万人。全体の数%なんです。お客さんの滞在時間がたいい、2時間から2時間半なので、「大分のランドマークとして頑張ってます」と正直言えないです。「私たちが大分にお客さんを呼び込むので皆さん頑張ってください」ともなかなか言えない。だから皆さんと一緒に動いていかないといけない。危機感が感じられないという指摘がありましたが、逆に「すこいんでしょ」と言われていることに対して、現状をしっかりと把握してもらう努力をしていないんです。私たちも助けてもらわないといけない立場であると相互理解してもらいながら、どう観光客を回すのか考えていかないといけないと思っています。

佐々木　分科会で大分県の観光のゲートウエイになろうという話が出ていましたが、うみたまこの後にお客さんがどこに行っているか把握しているんですか。

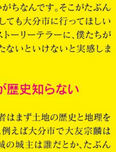
神田　外部から情報が回ってきますが、どうしても別府、湯布院、日田、竹田など県外にうまくプロモーションしている所に行くんです。宿泊では大分市に泊まるのあるユニークさを僕たちが見いだせていない。要はふわっとした状況の中で生きてきて、困っていないんです、全然。ふわっとしが認識していないんで、「大分市、鳥天、うーんそれを食べるんだったらこっちの方が有名だ」とかつい言ってしまいがちなんです。そこがたぶん惜しいところ。どうしても大分市に行ってほしい理由があるというストーリーテラーに、僕たちが力なる認識を強く持たないといけないと実感しました。

親世代が歴史知らない

佐々木　新聞記者はまず土地の歴史と地理を学べと言われます。例えば大分市で大友宗麟は知ってるけど府内城の城主は誰だとか、たぶん知らないんじゃないかと思うんですね。その辺で市の観光プロモーションとして心掛けていることがありますか。

峯（蒲介・観光分科会）　大分市として大友ブロモーションを数年前からしていますが、一般層の関心を高めることに力が足りていないところがあると思います。観光セクションと教育セクションの両方で取り組んでいて、学校教育では副読本で教える取り組みをしています。私もそうですが親が元々大分市民じゃなくて大分のことを知らない人が多くて、学校教育でも以前はあまり教えていなかったので、今は教えるようにしています。昨年は宮下あきら先生のビジュアルを使わせてもらって、まず名前を知ってもらい、歴史に関心を持っていない人にも興味を持っていただく取り組みをやっています。

佐々木　大分市民が知ることで誇りを持てますので、ぜひプロモーションを やっていってもらいたいと思います。高山さんも歴史に興味があって勉強しようかと言っていましたが、いかがですか。大友家は家臣団がたくさんいて、県内にその名字の人がたくさんいますか。



商業／若手リーダー
Eichiro Takayama
高山英一郎 さん
大分市在住、36歳。高山活版社代表取締役。大学を中業後、2002年に高山活版社に入社。14年に自社活版印刷ブランドを立ち上げた。

高山　私は歴史を学ばなければいけない方で、勉強不足と思います。今の話を聞いていて大友宗麟しかないと思えるし、逆にそれ以外にお面白いのかなと思えるんですけど。勉強不足なんですけど、朝業者と3代目が南蛮文化や宗麟を好きで、調べていて本を出したんだいです。

小野　高山さんの3代目は大分の文化発展のためにサロンのようなことをやっていた人ですよね。機縁新さんの女さんや赤瀬川さんも関わっていて、地域の文化ルネサンスのような貢献をなされた家ですので、ぜひ発信してもらいたいと思います。

内への売り込みが大切

佐々木　観光について山下さんにお聞きしたいんですが、「休みだから旅行に行こ」じゃないツーリズムがすごくはやっているということで、大分市にアドバイスがありますか。

観光／アドバイザー
Masaki Yamashita
山下真輝 さん
大分市出身、東京都在住。46歳。ジェイテーピー旅行事業本部観光戦略室観光立国推進担当マネージャーとして、地域活性化事業に携わる。

山下　他の街も、特に県庁所在地はアイデンティティーを探すのに苦労していて、自分たちの足元を深く掘ることなしに観光はないんだろうと思います。市の物語で盛り上がって飲むということが、長崎などでもあります。長崎自慢語で24時間飲んでいるとか、福井市は2018年に大河ドラマを誘致しようと、由利公正にフォーカスして活動しているんですが、市議会でも由利押しでいくのか、一美谷の浅倉家で押すのか大激論が起きています。私はどっちでもいいんじゃないかと思うんですが（笑）。街の中で大論争なんです。それくらい地元の歴史に熱すぎることが大事で、大人が熱く語っていないと子どもは絶対語らないですよ。まず子どもの教育からと言うんですが、そもそも大人が自分の街のことをがぶりについていませんかという話をよくします。やっぱりみんなが誇れるようにして、外に売り込んでいくことは大事ですが、アクターのマーケティングとインナーのマーケティングの方がウは大事なんです。観光客にいかに来てもらうか考えすぎるとつらくなってくるんで、まずは自分の街を知る活動をすれば、その情報が自然と外に発信されていくんです。皆さんが街を盛り上げていく活動をしっかりやれたらいいんじゃないかなと思います。

小野　就活の学生に話を聞くと、「とにかくアウトプットしないといけないんです」と言って、それに血道を上げている。全然自分がインプットしていない、しばらくすると何も言うことがない自分に気付くと。足元を掘る地道な作業が実は楽しいんだ、その楽しさが外に伝わってくると「おっ」と思われるというのは、その通りだと思います。

ここしかないもの持つ

佐々木　大分市でも最近そういう活動が結構起きていて、たぶん10年前にはあまりなかった気がするんですが、とにかく大分の人は自慢が下手で、実はいいことに気付いていないじゃないかとよく指摘されます。

小野　じゃあ佐々木さん、大分市の魅力を挙げてください。

佐々木　最近好きなのは、由布と鶴見と高崎山の山並みですが、良さは外から見ないと分からないのかもしれません。日田、竹田は47都道府県を全部回って、「大分はすごくいいところだ」と言っていましたが、いかがですか。

武田　正直、日本中にいいところはいっぱいあります。その中での競争だという発想を持った方がいい。先ほど出た歴史やアイデンティティーの掘り下げは大事で、地道な作業が必要です。東京から片道飲万円掛けて飛行機で来てもらうのはなかなハードルが高いです。現状から考えると、ホテルのジングルやツインがあるのが強みな。各種のイベントや取り組みはいろんな場所で行われていて、同じテーマに関心がある人は何万円掛けでも来るので、そういう人をうまく宿泊施設に結び付けていくと。シングルルームのホテルで土日は家族を受け入れているところがあって、お父さんとお母さんと高校生の娘は別々の部屋の方が実はいい。そんな観光もあり得ますし、いろんなとんがった人を連れてくるのもいいと思います。

交流／アドバイザー
Hiroshi Takeda
武田浩 さん
名古屋市出身、49歳。日本政策投資銀行大分事務所長。1990年、日本開発銀行入行。2014年から現職。農林ほ街歩き、旅行、スポーツ観戦。

小野　交流分科会で出た話と関連しますが、わさわさ何万円も払って飛行機で来るわけですよね。藤谷（浩介）さんと大分銀行の廊野原取の対談で、ここでしか食べられないものがあればわさわさ行くんだと藤谷さんが話していました。そこにしかないものを持ったところが大切だという話で、交流分科会の出ていましたが、大分は鳥天だというけど、その鳥はどこから来ているんだ、ブラジルなのかと。大分は農水産物もたくさん取れるので、大分市のレストランで他の17市町村の産品を使って消費してもらうと、苦しい市町村の人の大分市に対する見方も変わってくるんじゃないかと感じました。

食材もっとPRしたい

佐々木　食が観光になる時代ですが、大分は素材がいいから素材に頼っているという話がありましたが。

松本（宗三・観光分科会）　魚も野菜もすごくいい物があって、魚はあまり仕事の必要がない。県外の方はそのままお出しするのが一番喜ばれる。

高山　組織や地域が活性化するときによく聞く言葉が、「若者・よそ者・ばか者」。その中で大分の未来や元気をつくっていく私が属するのは若者、そして歴史を学んで歴史ばかになるくらいのことを担っていけば、力になれるのかなと思います。

神田　産業都市として発展してきた大分市は、県外や県内外からたくさん人が流入してつくられた都市であることを再認識したときに、頑なない、アイデンティティーがない。これを逆にチャンスと捉えると、いろんなチャンスがあるんじゃないかな、いろんな顔をつくれるんじゃないかなと。正しい歴史背景を認識して掘り下げて、どんなストーリーがあるのかを自分たちの武器にして外に発信したら子どもたちの世代に伝えたいていかなくと、大分に来て楽しんでいただくことが難しいのではと痛感しました。これから私も観光産業に携わるものとして、一人の大分市民として、お客さまを温撃（しんし）に対応したいなという思いです。

八坂　大分市中出身地の杵築市を含めて大分県全体が大好きで、本当にこんないい所はないと思っています。歴史の部分では、大分は西洋音楽発祥の地、西洋演劇発祥の地であるので、そこを自分の中でアカデミックに捉えて今後何かやっていけばいいなと思っています。

交流／若手リーダー
Chikage Yasaka
八坂千景 さん
杵築市出身、43歳。NPO法人derik-pauseで代表。県美術史学会、県美術史学会、県美術史学会、